

コロナ社会で共に生きるために

No. 8

他者への思い



古典籍・大蔵経総合研究班研究員
龍谷大学先端理工学部教授
道元徹心

新型コロナウイルスの感染拡大により、9月4日の時点で世界の感染者数が2603万人を超えました。国内の感染者数も合計7万人を超え、細心の注意のもと生活していてもいつ感染するかもしれない深刻な状態です。こうした中、地域やコミュニティーで感染者が出たとなると、彼らを誹謗中傷する言葉がSNSなど通信媒体を通じて流れ、感染者やその家族にまで根拠のない噂話が広まり差別扱いする事象を耳にします。人間がウイルスと闘うと同時に人間同士が闘う構図が生まれているのです。

過去にもスペイン風(1918-)のような感染症の流行は幾度となく人々を襲ってきましたが、これほど急激な感染拡大や通信媒体による感染者への中傷は先進技術がもたらした負の側面といえるでしょう。いずれワクチンが開発されこの状態が収束されたとしても、コロナに限らず他者を安易に攻撃する言動が許される社会であってはならないと強く感じます。

霊長類学研究者の山極寿一博士は次のように述べています。「ゴリラやチンパンジーだと、どちらか一方に加勢するよりもトラブルそのものを抑えようとする。ゴリラは攻撃した方をいさめるし、当事者より小さいゴリラが介入することもある。チンパンジーもよくけんかに割りこんで仲裁するし、傷ついた者を抱いてなぐさめる。これはゴリラが体の大きさにとらわれずに、互いに対等でありたいという気持ちを、チンパンジーはトラブルが広がることをおそれる気持ちを強くもっているからだ。その基本的な感情がもとになって彼らの社会はつくられている。・・・中略・・・昨今の生活状況の変化は見られる機会や意味を減らし、感情に重きを置いた行為を選択させているように見える。・・・中略・・・インターネットのおかげで自由に情報にアクセスできるので、だれにも相談せず知識を得たり判断できるようになった。他者を否定することも肯定することも、自分ひとりの判断で行えるようになった。それは他者の存在を考慮せず、自分の感情のおもむくままに行動する傾向を助長してしまう。」(『ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」』毎日新聞出版、2018年4月、151頁-153頁)

まさに今、山極博士が指摘している状況と思われまます。確かに、コロナ禍であってもインターネットの普及により大学の授業はオンラインによって可能となりました。しかし受講生同士が顔と顔を合わせ交流していたものが遮断されたのも事実です。大学に限らず人と人との接触が制限される日々の中で、互いに他者の存在感が希薄になったことは否めません。そして理不尽なことへの怒りや先が見えないことへの恐れなどから、たとえ見ず知らずの人であっても感情のままに相手を傷つけるのかもしれない。

一方、人間は言葉を通じて他者への思いやり・いたわりの心を伝えることができ、コロナ禍における医療従事者への敬意と感謝のメッセージなど良い一例です。生活を送る上で、他者を思い理性と感情のバランスを保つことはとても重要でしょう。まして今はコロナ禍による大きな不安や思い通りにならないことを多く抱える日常です。その不安や苦しみに宗教はどのように向き合うのでしょうか。

そこで次に仏教者の立場から考えてみたいと思います。平安時代から鎌倉時代にかけては疫病^{えきびょう}と隣合わせの時代でありました。そのような時代を生き抜いた僧侶は何を語ったでしょう。

比叡山で修行され天台宗を開かれた伝教大師最澄(767-822)の有名な言葉に「己^{おのれ}を忘れて他を利するは慈悲の極^{きわ}みなり(忘己利他^{もうこりた})」とあります。仏の慈悲行に奮闘された大師の言葉に仏道を基底とした他者を思う心が伝わってき

ます。(利他とは他者を利益し導くこと。親鸞聖人においては阿弥陀仏から衆生へのはたらき) その比叡山で若き 20 年を過ごされた親鸞聖人 (1173-1263) は阿弥陀仏の救いを拠りどころとして 90 年の生涯をお念仏ひとすじに生き抜かれました。本当に悲しいことに私たち人間は時として他者を攻撃し、煩惱の海に浮き沈みしながら、欲に振り回される内面を有しています。その人間の内面を厳しい眼で直視しながら悲嘆し同時に「救いの慶び」を表現されたのが親鸞聖人です。

親鸞聖人が関東から京へ帰洛後、門弟に宛てたお手紙が残っています。その中で文応元年 (1260) 12 月 14 日、親鸞聖人 88 歳の時に関東の乗信房へ宛てた返書には次のようにあります。現代語訳は霊山勝海先生の解説によります。

なによりも、こぞ・ことし、老少男女おほくのひとびとの、しにあひて候らんことこそ、あはれにさふらへ。たゞし无常のことはり、くはしく如來のときをかせおはしましてさふらふうへは、おどろきおぼしめすべからずさふらふ。まづが身には、臨終の善惡をばまふさず、信心決定のひとは、うたがひなければ正定聚に住することにて候なり。さればこそ愚癡无智のひとも、おはりもめでたく候へ。・・・以下略

(『末燈鈔』(6)『聖典全書』2 巻・786 頁-787 頁)

なんととっても、去年から今年にかけて、老少男女多くの人びとが、あいついで亡くなりましたことは、悲しいことでもあります。しかしながら、人のいのちが無常である道理は、釈尊がくわしくお説きくださっているのですから、いまさら驚きになることはありません。まず私自身は、臨終のさまの善し悪しを問題にはいたしません。信心が決定している人は、疑いのところがありませんから、往生が約束された正定聚の位に住すのです。そうですから、愚かな人も無智の人も、臨終をめでたくまっとうすることができるのです。

(霊山勝海『親鸞聖人御消息』本願寺出版社、2006 年、105 頁-106 頁)

無常の現実に向けた何とも淡々と厳しい言葉に聞こえますが、ありのままに見することを示しておられます。

このお手紙を書かれた年の様子が鎌倉幕府の歴史書である『吾妻鏡』に記されています。6 月 1 日の記事に(筆者が原文を書き下す)

疾風暴雨洪水。河辺ノ人屋ハ大底流失シ。山崩レ。人多ク盤石ノ為ニ圧死セラル。

とあり、甚大な豪雨災害があったことが分ります。また同年の 6 月 12 日の記

事として

諸国ノ寺社大般若経転読ノ事。国土安穩疾病対治ノ為ニ。諸国ノ寺社ニ於テ。大般若最勝仁王経等ヲ転読セラル可キ也。

とあり、幕府が寺社に対して疫病を封じるために『大般若経』などを転読するよう命じています。

仏道として、伝教大師最澄と親鸞聖人には共通する面がありますが（一乗：皆が成仏する教え）、他者を思う心のありようが異なっています。伝教大師は修行を極め他者へもはたらきかけ慈悲心を投げかけようとされます。親鸞聖人は疫病などにより多くの命が失われることを大変悲しまれつつも、無常の世の中にあつて阿弥陀仏のはたらきによる自らの浄土往生の一点に返書の内容を絞られ、門弟方へ正しく真実の法が伝わるように精進されています。そのお姿に私は親鸞聖人が他者を思う心のありようを感じます。

蓮如上人（1415-1499）は御同朋御同行（共に同じく念仏する仲間）として親鸞聖人の教えを受け継がれ、人々が共に手を取り合い悲しみをも分かち合う生き方を示されました。

これから社会は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けた新しいステージに移行すると言われていています。私たちはコロナ社会をより良く生き抜く知恵を絞り行動をおこしていく必要があります。不安な今だからこそ、ありのままに知見し自らを問い直し他者を思う気持ちを大切にしていきたいと願います。

参考文献

新訂増補『國史大系 吾妻鏡第四』（吉川弘文館、1975、741頁-742頁）

【著者紹介】

専門：仏教学（天台学・叡山浄土教・日本仏教）

編著書：『日本仏教の展開とその造形』（編著、法蔵館、2020）

『比叡山の仏教と植生』（編著、法蔵館、2020）その他